

# 祖国消滅絶望から再起

## 逆境を進む経営者たち ジヤリ道

メトラン(四)会長

### トラン・ゴック・フック②

ベトナム、サイゴン(現ホーチミン市)。モノクロのスクリーンに映し出される盲目の侠客。鮮やかな殺陣で悪人を斬り倒す映画「座頭市」にフックは夢中になった。

ダラットでの両親の事業が成功し、15歳の時一家はサイゴンに移住。フックは高校をさぼっては映画館に入り浸り、空手道場にも通った。

1968年6月。フックは憧れの国、日本にやって来る。

### ■バイトの日々

新宿の日本語学校で一年半学んだ後、東海大学工学部に入学。小田急線の秦野駅近くに下宿した。「新入りは便所の隣の部屋。風呂も最後は汚れがひどくて入れたもんじやない。でも、嫌じゃなかった。なんでも吸収したね」

大学2年の時、両親の事業が傾き、送金が停止。生活費と授業料を稼ぐために和菓子屋で働く。剣道を教えてくれた恩師の故田村新三郎が買ってくれた中古車と和菓子配達する日々を明けくれた。

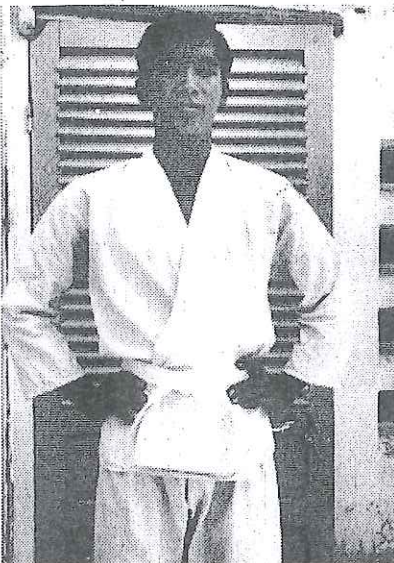
将来ベトナムでヤシ油の洗

将来ベトナムでヤシ油の洗

### ■ねたみと偏見

人工臓器の開発者として世界的に知られた故青木利三郎社長は、技術を習得しようとする欲だったフックに開発や製造の機会を惜しみなく与えた。しかし、会社の組織は年功序列。アジア人へのねたみや偏見も根強かった。

フックが独自に開発した機器の特許には、関係のない社



ベトナム人が教える近所の空手道場に通っていた高校生の頃。日本の武術や映画に夢中になった



杏林大学で研修していた29歳の頃(後列右)。自宅と大学を始発と終電で通う日々。睡眠時間は3、4時間だった

### ■サイゴン陥落

員の名前がすらり。フックが改良した点滴の液漏れ防止策が数カ月後、元の状態に戻っていたこともある。フックはたまらず声を荒げた。「自分の親や子供のために使つて考えてやってください」

テレビでは連日、ベトナム戦争の戦況が伝えられている。「おまえは何人殺したんだ?」。心ない言葉を浴びせられ、フックは奥歯をかみしめた。

結婚したばかりの妻、満子(当時24歳)と新宿の街頭でポトピープルのための募金活動をしながら、公衆電話から何度も国際電話をかけた。

両親の声は聞こえるが、こちらの声が届かない。「逃げて早く逃げて」。フックは叫ぶことしかできなかった。

1975年4月30日。サイゴン陥落。ふるさとの南ベトナムが消滅した。両親や兄弟たちとは音信不通。社会主義国になった故郷にはもう帰れない。

茫然自失のフック。一カ月会社に行けず、新宿の町をあどなく歩いた。「駅のホームには近づかなかつた。高層ビルにも。そこから飛び降りそうなのを抑えられそうに

なかった。生きる目標も意味も完全になくしたんです」

### ■人工呼吸器と出合ひ

新天地を求めてアメリカやカナダへ渡る友人を見送る度に心が揺れた。そんなフックに田村先生が言った。「目の前のことを乗り越えられなかつたら、どこに行っても同じだ。日本で築いたものはお前の財産じゃないか」。フックは日本に残る決意をする。

自分にはできないテーマを探し始めたフック。日本では命に直結するハイリスクの医療機器は輸入に頼っていることに気付く。人工呼吸器もその一つだった。

杏林大学医学部での研修を志願。手術に麻酔の助手として立ち合いながら、臨床の最前線で呼吸のメカニズムを学んだ。1980年代までさかのぼって膨大な量の医学文献も読みあさった。

カナダのトロント小児病院で同じく高頻度振動換気の研究をしていた聖路加国際大学大学院特任教授の宮坂勝之と出合い、82年に「HFO」の前身となる「高頻度ジェット換気(HFJV)」方式の人工呼吸器を共同で完成させた。

苦楽を共にした宮坂教授だが、医師と同等の知識を持つ現場のさまざまな声から本質をくみ取れた」と話す。

「彼は強い。祖国を失って退路を断られたんだ。順風満帆でやってきた日本人とは違う」

(山田浩美)

(敬略称、毎週金曜日掲載)